



筑紫女学園大学リポジット

Emotional expressions observations of self and others' images in adolescents with autism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 理香, MORITA, Rika メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/128

青年自閉症者における観察的自己および他者に対する情動表出

森 田 理 香

Emotional expressions observations of self and others' images in adolescents with autism

Rika MORITA

対人的相互交渉の障害、意思伝達の障害、反復的・常同的な行動様式に特徴づけられる発達障害である自閉症に関する臨床的記述において、自閉症は自己と他者の違いを認識する自他の弁別能力に障害を持つため、自分と他者を比較しながら自己意識を確立することが困難であること、あるいは、自己の状況や混乱を客体化することが困難であることが指摘されてきた（杉山、1992；小林、1999）。

自己認知に関する研究としては、古くは鏡像を用いた研究がある。鏡に映った自分を自己と認知することは、自己意識の指標のひとつとされる。鏡像の自己認知が可能かどうか検討する方法としてしばしば用いられるものに、マーク課題がある。これは被験者が鏡を見ていないところで被験者の鼻などの顔の一部に口紅を塗り、そのあと鏡を見せて、鏡に映った自分を確認しながら鼻を触ることができるかどうかを検討する課題である。自閉症児者を対象とした研究では、鏡像レベルの自己意識の確立は自閉症児者においても可能であることが明らかになっている（Geraldine&Fawn、1984；Spiker&Ricks、1984；別府、2000；赤木、2003）。これらの研究では、一定の発達年齢を超えた自閉症児者は鏡像の自己認知が可能であった。ここから、鏡像の自己認知は自閉症の障害特徴に左右されるというよりはむしろ発達年齢が影響していると結論づけられる（別府、2000）。

定型発達児における鏡像の自己認知課題において、照れやはにかみなどの情動表出がしばしば観察される。すなわち、定型発達児は鏡に映った自分を認知する際に、しばしば照れやはにかみといった表情を浮かべるといのである。Lewis(1993)は発達初期に見られる喜び(joy)や悲しみ(sad)、興味・関心(interest)、怒り(anger)、嫌悪(disgust)などに代表される基本的情動と区別して、困惑、照れ(embarassment)、はにかみ(shyness)、恥(shame)、罪悪感(guild)、誇り(pride)などの自己意識的情動(self-conscious emotion)の存在を指摘した。基本的情動の生起には自己意識を必要としないのに対し、自己意識的情動は自己意識の関与がなければ生起し得ないとしている。Geraldine & Fawn(1984)、Spiker&Ricks(1984)の自閉症児を対象とした鏡像の自己認知に関する研究においては、これらの対象となった自閉症児には定型発達児にみられる様な自己鏡像に対する照れや困惑はみられなかったことが報告されている。別府(2000)、赤木(2003)はこの点に注目し、自己意識的情動ではなく自己意識的行動という行動レベルでこの事象を取り扱った。すると、自閉症児者において行動レベルであるがとまどいといった自己意識的行動がみられることがわかった。

さらに、赤木（2003）はとまどいをどのように他者に伝えるかという点について検討したところ、自閉症者はとまどいを感じてはいるが、それを伝達する行動を示しにくいことが明らかになった。

Hillier & Allinson（2002）は、自己意識的情動の一つである情動として困惑（embarrassment）を取り上げ、自閉症児における困惑の状況理解に関する研究を行っている。この研究では自閉症児は観衆の前では困惑が生じるという状況の理解はよかったが、自己の情動経験が反映されるような他者の困惑についての共感的理解が困難であったことが示されている。これまでの先行研究から、自閉症児は鏡像レベルであれば自己を認知することが可能であり、さらに照れや困惑等の認知的な理解は可能であるが、他者の照れや困惑を共感的に理解することや自己内に生じた情動を他者に伝達することに困難を持ち合わせているといえる。

では、臨床レベルでいわれる、自閉症児者の自己意識確立の困難性は具体的にはどのような事象のことをいうのであろうか。これに関して検討する材料のひとつとして、自閉症児における人称代名詞の使用についての研究がある。人称代名詞の使用は自己意識獲得の指標として扱われ、その誤使用は自己意識獲得の遅滞を表すといわれている（梶田、1988）。自閉症児・者の人称代名詞の誤使用は日常的によく観察されるものである。Lee&Hobson（1994）は自閉症児における人称代名詞（I、my、me）の使用について調査を行っている。自閉症児と知的障害児、定型発達児とで人称代名詞の使用・誤使用について比較した結果、自閉症児は人称代名詞を用いずに、自分の名前を用いるという特徴がみられた。この結果について、Lee&Hobson（1994）は、自閉症児は自己と他者の関係性において自己を位置づけることに困難をもつのではないかと考察している。

このように、自閉症児・者の自己意識に関して検討するに当たって、自己意識における他者性を考慮に入れることは必要不可欠であると考えられる。“自己”そして“他者”に焦点を当てた研究に、自閉症児者の記憶に関する研究がある。Millward、Powell & Jordan（2000）の研究では、自閉症児の自分あるいは他者の行為に関する記憶について比較している。定型発達児は自己の行為と他者の行為の記憶に関して、自己の行為の記憶が優位であったが、自閉症児は他者の行為に関する記憶の方が優位であった。他方、単語の記憶における自己準拠性効果（自分に当てはまるか否か）を調べる心理検査では、定型発達児においては自分に当てはまる単語の記憶のほうが優位であり自己準拠性効果がみられる。自閉症児の自己準拠性効果について検討した研究では、自閉症群はこの心理検査において自己準拠効果がみられなかった。ここから、自閉症児が自己に関わる情報とそれ以外の意味情報と区別せず記憶するという特異な認知処理を行っていると考えられ、自閉症児の自己意識の希薄さが示唆された（十一・神尾、2001）。

これらの研究は自閉症児者の自己、他者について認知レベルで研究を行っている。自閉症児者の自己について概念レベルで取り扱ったものに、Lee&Hobson（1998）の研究がある。Lee&Hobson（1998）はDamon & Hart（1988）によって提案されたモデルを使用して自己を細かく分類し、自閉症児の自己概念について検討した。Damon & Hart（1988）は自己を主体としての自己（自己の連続性、個別性、意思、自省）と客体としての自己（身体的自己、行動的自己、社会的自己、心理的自己）に分類している。Lee&Hobson（1998）は身体的自己、行動的自己、心理的自己、そして社会的自己に関してどれだけ言及したかについて、自閉症児と定型発達児の対照群とを比較してい

る。その結果、前者3つの側面に関する言及量は自閉症児と対照群の間に差はみられなかったが、社会的自己においてのみ自閉症児群の言及量が少なく、ここから自閉症児における自己の社会的領域の希薄さが指摘された。

これまでの先行研究から自閉症児・者は鏡像レベルにおいては自己意識の獲得は可能であるが、認知処理過程においては自己と他者を自発的に区別することが少なく、自己を概念化する際には社会的側面を取り入れていないという特徴がみられている。また、自閉症児は自己の鏡像認知が可能であっても、自己意識情動である照れや困惑等の表出が特徴的であったという研究結果（別府、2000；赤木、2003）は自閉症児・者の社会性の障害と関係していると考えられる。そもそも、自己意識的情動は他者との関係性と密接に関連しており、自己および他者、社会的関係という観点からの評価がなければ、いかなる場合でも生じし得ないといわれている（遠藤、2002；Barrett、1995）。つまり、自己意識的情動は社会的基準に照らし合わせて自分を意識したときに生じるといふ点において、社会的情動ともいえる。これは、社会的文脈において、児童の自己意識的情動の表出について検討した研究において、社会的刺激が強いほうが自己意識的情動の表出量が多かったという研究からも明らかである（森田、2006）。自閉症児者を対象とした先行研究（Geraldine & Fawn、1984；Spiker & Ricks、1984；別府、2000；赤木、2003）において、自閉症児に定型発達児が示すような恥ずかしさ等の表出が見られなかったのは、自閉症児は他者との相対的視点、いわば、社会的視点からの自己意識を持つことに困難性を有するからだと考えられる。しかし、これらの研究において用いられた実験状況は自己を提示するという状況ではあったものの、他者の視線といった社会的な文脈に関しては取り扱っていない。

そこで、本研究では自閉症者において観察可能な自己、すなわち自己映像を見るという自己を客体化する場面において照れや困惑等の情動表出がみられるかどうか、そして、社会的文脈は情動表出に影響を及ぼすかどうかについて検討することを目的とする。本研究では鏡像の自己認知が可能であり、発話によって自分の状態についてある程度語ることが出来る自閉症者を対象とし、モニターで自己を観察する場面においてどのような情動の生起がみられるか、特に、照れといった自己意識的（社会的）情動がみられるか、さらに、情動表出において他者の存在による影響を受けるかについて検討する。

方 法

対象者 知的障害者厚生施設に入所している自閉症者9名（男性9名）、同施設に入所中の知的障害者11名（男性5名、女性6名）を対象とした。自閉症者に関しては、自閉症という医学的な診断を受けており、さらに筆者によりDSM - IVの基準に適合している者が選ばれた。MAは田中ビネー知能検査によって測定された（Table 1）。

Table 1 対象者の CA, MA の平均値, 範囲

群	n	CA		MA	
		Mean	Range	Mean	Range
自閉症者群	9	27 : 1	21 : 2 - 36 : 4	7 : 10	5 : 3 - 12 : 2
知的障害者群	11	30 : 7	22 : 5 - 47 : 11	5 : 6	3 : 9 - 11 : 8

対象者が自己意識に関する基本的な項目をどの程度クリアしているか確認するために、事前に施設の担当職員が以下の質問項目に関するチェックを行った。(a)自分の名前の認知、(b)自己の身体部位の認知、(c)自分の写真を自分と分かるかどうか、(d)自己の所有物の認知、(e)人称代名詞の使用の有無・誤使用、(f)家族の認知、(g)家族から見た自分の立場の認知(母親から見て自分は息子だ、等)。これによると、自閉症者群は(a)から(d)の項目は全てクリアしていることが確認された。(e)人称代名詞に関して4名が使用の未確認、誤使用が見られ、(g)家族から見た自分の立場の認知については3名が十分に理解あるいは使用できていなかった。知的障害者群においては、2名において(d)所有物の間違いが見られ(MAが下位の2名)、(g)家族から見た自分の立場の認知については2名が十分に理解あるいは使用できていなかった。

対象者のグループ分け 対象者20名を1グループ4名からなる全5グループに振り分けた。その際、グループが等質になるように、1つのグループが自閉症者2名、知的障害者2名ずつになるよう構成した。ただし、対象者の人数の都合により、自閉症者1名、知的障害者3名からなるグループが1グループあった。対象者はランダムに振り分けられた。

提示映像 グループごとに提示映像を事前に作成した。映像に登場するのは同じグループの対象者4名と対象者が全員知っている施設の指導者1名、面識のない成人女性(知らない他者)1名の計6名である。すなわち、“自己”、“同席している他者”(同じグループで実験場面を共にする他者3名で同じ施設に入所している者)、“既知の他者”(対象者が共通して知っている施設の指導者)、“知らない他者”(対象者が共通して面識がなく、実験場面にも同席しない成人女性)である。6名が登場する順番はグループによって異なり、ランダムであった。顔の正面のアップと全身が映るように撮影されており、表情はニュートラルであるものを使用した。一人が25秒間登場した後5秒間黒い画面が映り、次の人が登場した。提示映像は2分30秒であった。

実験条件 個別条件と社会条件を設定した。個別条件では対象者のみで提示映像の視聴を行い、社会条件ではグループの4名と実験者2名の計6名で提示映像の視聴を行った。

手続き 映像の提示は知的障害者厚生施設の施設内の一室で個別に実施された。対象者は上述の2つの条件で計2回提示映像を視聴し、各条件は数日間隔をあけて行われた。対象者は部屋に入室後、モニターから約1.5メートル離れた正面に着席するよう促された。対象者がリラックスできるように雑談をした後、ビデオを観よう教示を行った。個別条件では教示を行った後、実験者はすみやかに退室して対象者が1人で着席した状態でモニターから映像を提示するようにした。社会条件では、モニターの正面1.5メートルのところ全員が横一列に並んで着席した状態でモニターから映像を提示した。両条件において、映像を見終わった後に“誰が映っていましたか(自己認知の

確認)”“ どのような気持ちがありましたか ”“ この中 (うれしい、いや、はずかしい ‘ 5 cm × 12cm の白い紙にひらがなで書いてある、ことばカード ’) から選んだらどれになりますか ” という質問を口頭で個別に質問を行った。所要時間は約15分であった。

対象者における情動の表出のコード化 情動の表情表出について、Izard(1980)が開発した Affex (A System for Identifying Affect Expressions by Holistic Judgement) を用いて分析を行った。Affex は解剖学的知見に基づいて顔面筋の変化に注目して表情表出された情動のコード化を行うものである。本研究における情動のコード化は訓練された評定者によって行われた。提示映像を見ているときの対象者の表情を録画した VTR のうち 2分30秒を 5秒ごとに区切ってコード化を行った。5秒中1.5秒以上表情の表出が見られたものについてそれぞれの情動を当てはめ、2.5秒～5秒持続した情動を 1ポイント、1.5秒～2.5秒持続した情動を 0.5ポイントとし、1.5秒以下あるいは表出が見られない時は 0ポイントとした。つまり、1場面につき25秒の映像を 5秒ずつの 5つの単位に分け、それぞれの単位で情動表出が見られたかどうかについて評定した。全部で 4場面 (「自己映像」場面、「同席している他者映像」場面、「既知の他者映像」場面、「知らない他者映像」場面) あるので、提示映像 1場面につき 0～5ポイント、4場面合計で 0～20ポイントの得点が配分されることになる。

結 果

表情表出に関する量的分析 個別条件と社会条件の 2条件において表出された情動の表出量 (4場面の平均値) に群間で差があるか検討するために、2 (群) × 2 (条件) の 2要因分散分析を行った。その結果、群と条件の交互作用が有意傾向であった ($F(1,18) = 3.74, p < .07$)。多重比較を行ったところ、社会条件における群の単純主効果が有意であり、社会条件のときに知的障害者群は自閉症者群よりも情動表出量が多かった ($F(1,18) = 6.23, p < .05, \text{Figure 1}$)。

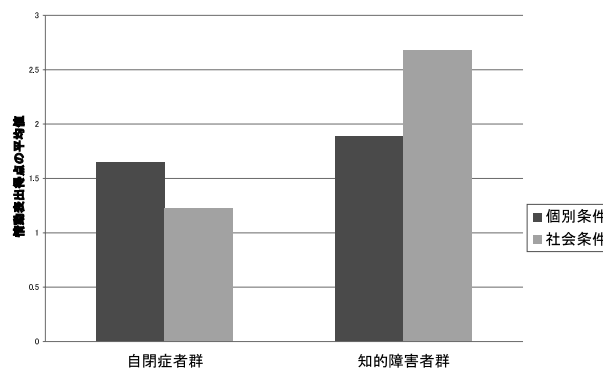


Figure 1 各条件において表出された情動量の平均値

次に、各提示映像に対して表出された情動の量に関して群間で差があるか検討するために、2 (群) × 4 (人物) の 2要因分散分析を行ったところ、群と人物の交互作用が有意であった ($F(3,54) = 3.46, p < .05$)。多重比較を行ったところ、“既知の他者”に対して知的障害者群は自閉症者群よ

りも多く情動を表出していた ($F(1,18) = 9.27, p < .05$)。他方、自閉症者群においては、“同席している他者”、“既知の他者”映像よりも“自己映像”に対して情動表出が多く、“既知の他者”映像に対してよりも“未知の他者”映像に対して情動表出が多いという結果であった ($F(3,16) = 3.50, p < .05, \text{Figure 2}$)。

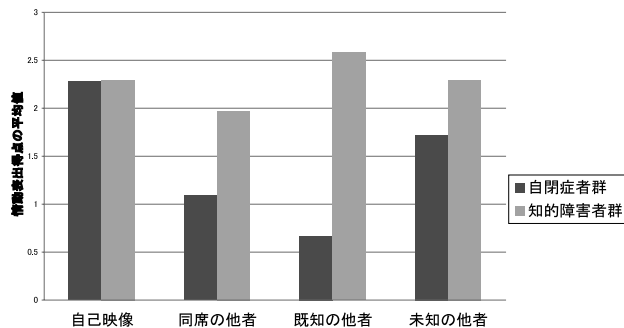


Figure 2 各提示映像場面で表出された情動量の平均値

表情表出に関する質的分析 提示映像視聴時に表出された情動として、興味、喜び、軽蔑、嫌悪、照れとそれらをミックスしたものがあつた。それぞれを“ポジティブ：興味・関心、喜び”、“ネガティブ：軽蔑、嫌悪”、“照れ：照れ・はにかみ”に分類した。ポジティブとネガティブがミックスされた情動はみられなかったが、ポジティブと照れがミックスされた情動がみられ、その場合は照れに分類された。“ポジティブ”、“ネガティブ”、“照れ”、“ニュートラル”のカテゴリーに分類し、それぞれの度数について対数線形モデルを用いて分析を行った。その結果、自己映像視聴時に表出された情動のカテゴリーと条件の交互作用に有意差がみられ、ニュートラルは個別条件で多く ($z = 2.157, p < .05$)、社会条件で少ない ($z = 2.157, p < .05$) という結果であった (Table 2)。

Table 2 各条件において表出された情動の種類

		Positive	Negative	Embarrassment	Neutral *
自閉症者群	個別	12	0	6	27
	社会	13	4	6	22
知的障害者群	個別	18	0	0	37
	社会	27	0	6	22

* $p < .05$

情動の言語報告に関する検討 自己映像視聴時の情動の言語報告について対数線型モデルの当てはめにより分析を行ったところ、群間で有意な差はみられなかった。

考 察

自己映像・他者映像視聴時に表出された情動 自閉症者群において、知っている他者映像視聴時

よりも自己映像視聴時に情動表出量が多かった。ここから、他者を見る場面よりも自己を見る場面において情動の賦活が多く起こるといえる。さらに、他者映像視聴時にはポジティブかニュートラルの表出しかみられなかったが、自己映像時にはネガティブ、照れ等の複雑な情動が生起していた。すなわち、モニター画面に他者が映ったときは楽しさ・嬉しさ等の快感情を表出するか、関心を示さないというどちらかであったが、自己映像に対しては、照れあるいは嫌悪等の情動表出がみられた。このことから、自閉症者は自己映像視聴と他者映像視聴では異なる情動体験をしており、自己映像に対しては他者に対してよりも複雑な感情を抱いていたといえる。

また、自閉症者群において“同席している他者”、“既知の他者”よりも“知らない他者”に対して表出された情動が多かった。ここから、自閉症者は他者に対して一様に反応しているわけではなく、他者の質の違いにより情動の生起に違いが見られることが示唆された。

他者の存在による影響 知的障害者群は社会条件で情動の表出量が増加したが、自閉症者群は条件による表出量の変化がなかった。つまり、知的障害者は他者と場を共有することで、他者から情動的な影響を受けて全体の表出量が増加したが、自閉症者は情動の生起や表出はみられるものの表出量には変化はなく、他者の影響は受けにくかった。この結果は、自閉症児は情動を表出することに障害はないが、社会的な文脈の中で情動を使用することが困難であるという研究結果(Dawson et al., 1990; Joseph&Tager-Flusberg, 1997) さらに、とまどいを感じてもそれを他者に伝達する行動を示しにくいという研究結果(赤木、2003)と類似の傾向と考えられる。

次に、表出された情動の種類に関しては(Table 2)、自閉症者群の個別条件ではポジティブ、照れが表出されており、社会条件では、ネガティブが表出されている。知的障害者群においては、個別条件ではポジティブのみが表出されていたが、社会条件になるとさらに照れが表出されている。つまり、統計的には有意ではないものの、どちらの条件においても他者の存在によって、複雑な情動が喚起されている。知的障害者においてはネガティブな表情表出がみられず、表出された情動の種類が少なかったが、知的障害者群はのちの言語報告でネガティブ、あるいは照れを報告している。知的障害者は高いソーシャルスキルによってどのような対人的状況ではどの情動の表出を抑制すべきか、あるいは強調すべきかといった暗黙の社会的ルール(遠藤、2002)である社会的表示規則(social display rule)が働き、情動表出を調節したために、ネガティブな表情の表出として観察されなかったことが窺える。

自己観察場面に他者が同席することで自閉症者の情動表出が複雑化したという結果から、知的障害者ほどではないものの、自閉症者も他者の影響を受けていると考えることが出来る。しかし、自閉症群における情動表出の量的分析においては個別条件と社会条件での表出量に差はみられず、今後、より詳細な検討が必要である。

社会的情動の表出 自閉症者において表情あるいは言語のいずれかで照れの表出があった者は4名であった。この4名は自己意識のチェック項目において全てクリアしている4名と一致しており、照れの生起は自己意識の獲得によって起こるといえる Lewis (1993) の見解と類似の結果といえよう。すなわち、自己意識の獲得がなされていれば自閉症者にも照れという社会的情動の生起、表出がみられ得るといえる。

まとめと今後の課題 本研究において、自閉症者の自己観察における情動表出について照れの表出に注目し、さらに社会的文脈の影響について検討した。自閉症者は他者映像よりも自己映像視聴時において情動表出量が多いという本研究の結果から、自閉症者は視覚映像という直接的に自分自身が提示される状況においては、強く情動が賦活されるといえる。また、自己映像に対する表出はポジティブ情動が最も多かった。他者に対する表出が自己に対してよりも少ないことは、自閉症の社会的障害に起因すると考えることが出来る。しかし、既知の他者と比較して未知の他者に対しては情動を多く表出していることから、他者に対して一様に関心が少ないわけではなく、他者の質や関係性の要因が影響しているということが考えられ、この点に関して詳細に検討することが今後の課題といえる。

定型の自己意識の発達においては、他者のフィードバックや評価を取り入れながら、他者との相互作用の中で主体的な自己、客体的な自己を発達させ、そして多様化した自己を確立するというプロセスが想定される。もともと対人関係性における障害を持つ自閉症者は他者の信念理解に困難があるため（Baron-Cohen、1985）他者の視点を取り入れながら自己意識を獲得するのに困難性を抱えているといわれる。しかし、本研究では一部の自閉症者には照れの表出がみられ、また、社会条件において個別条件よりも複雑な情動の表出がみられた。これらの結果から、自閉症者は他者の視点を取り入れた自己意識の獲得に困難性を有するものの、他者との相対的な関係から自己意識を持つことが出来る可能性が示唆されたといえよう。また、本研究では自閉症者においても“照れ”などの社会的情動の表出がみられたが、“照れ”の特性に関して詳細な検討をする必要がある。久崎（2004）は、照れは自他が明確に分化した段階よりも自他未分化な段階で多く生起するのではないかということを考察している。今後、社会的情動と自己理解、他者理解のレベルと関連させて検討することが必要であるといえる。そして、他者との相互的なやり取りや自他の相補性といった視点を取り入れながら、さらに検討をすすめることが今後の課題といえよう。

付記

本論文の一部は、2001年度日本心理学会第65回大会で発表を行った。

謝 辞

本論文作成にあたり御指導いただきました九州大学教授針塚進先生に感謝申し上げます。また、ご指導・御協力頂きました、西日本短期大学元教授楠峰光先生、知的障害者通所更生施設Y更生センター施設長楠エツ子先生に感謝いたします。

引用文献

赤木和重（2003）青年期自閉症者における鏡像自己認知：健常児との比較を通して、発達心理学研究，14，149-160

- A.Lee, &Hobson, R.P.Hobson (1994). I, You, Me, and Autism: An Experimental Study, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 24, 155-176
- A.Lee, &Hobson, R.P.Hobson (1998). On Developing Self-concepts: A Controlled Study of Children and Adolescents with Autism, *The Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 1131-1144.
- Ashleigh Hillier, Lesley Allinson (2002). Understanding embarrassment among those with autism, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 32, 583-592.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., &Frith, U. (1985). Does the autistic child have a "Theory of Mind"?. *Cognition*, 21, 37-46.
- Barrett, K. C. (1995). A functionalist approach to shame and guilt. In J.P.Tangeney& K.W.Fischer (Eds), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press
- 別府哲 (2000). 自閉症幼児における鏡像認知, *発達障害研究*, 22, 210-218.
- Claire Millward, Stuart Pawell, D, Messer, R, Jordan (2000). Recall for Self and Other in Autism: Children's Memory for Events Experienced by Themselves and Their Peers, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 30, 15-28.
- Damon, W.,&Hart,D. (1988). *Self-understanding in childhood and adolescence*. New York:Cambridge University Press.
- Dawson, G., Hill, D., Spencer, A, Galpert, L.,&Watson, L., (1990). Affective exchanges between young autistic children and their mothers. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 18, 335-345.
- 遠藤利彦 (2002). 発達における情動と認知の絡み, 高橋雅延・谷口高士 (編) *感情と心理学* 北大路書房 pp2-40.
- Geraldine, D.&Fawn, C.M. (1984). Self-Recognition in Autistic Children, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 27, 519-537.
- Joseph, R.M.,&Tager-Flusberg, H., (1997). An Investigation of Attention and Affect in Children with Autism and Down Syndrome, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 27, 385-396.
- 梶田叡一 (1988). *自己意識の心理学*. 東京大学出版会
- 小林隆児 (1999). *自閉症者の発達精神病理と治療*. 岩崎学術出版社.
- Lewis, M. (1993). *Handbook of Emotions* The Guilford Press :New York
- 森田理香 (2006). 児童の自己意識場面における情動表出, *筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要*, 1, 273-283
- 久崎孝浩 (2004). 生後2年目後半における自他分化と社会的情動の関連性についての検討, *九州大学心理学研究*, 5, 53-63.
- 杉山登志郎 (1992). 自閉症の内的世界, *精神医学*, 34, 570-584.
- Spiker, D., Ricks, M (1984). Visual Self-Recognition in Autistic Children: Developmental Relations, *Child Development*, 55, 214-225.
- 十一元三・神尾陽子 (2001). 自閉症者の自己自己意識に関する研究, *児童青年精神医学とその近接領域*, 42, 1-9.

(もりた りか：発達臨床心理学科 講師)